
変わり始める君

今井結

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁々小説投稿サイト」で掲載中の小説を「暁々小説投稿サイト」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁々小説投稿サイト」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わり始める君

【作者名】

今井結

【あらすじ】

僕は変われるのか？

ハーメルン様にて同時投稿しております

有咲のポピパ加入が夏休み後になっております

月下の決意

「なあ．．．私さ．．．学校．．．行ってみようと思う．．．」

蝉時雨が街に響き渡る蒸し暑い真夏の夜のことだった。鮮やかな金髪を月明かりで輝かせた少女が共に縁側に座る青年に何処か真剣な表情で話しかける。

「そっか．．．え？．．．有咲．．．学校行くの？高校入って一回も行っていないの？」

「そ、そうだよ．．．なんかさ、今日おもしれー奴が家に来たんだよ、アホみたいにキラキラとかドキドキとか言ってたんだ．．．」

「おっおう．．．なんか凄い奴だな．．．」

青年が少し引き気味に答える。

「喋ってて抵抗が無かったんだ……」

「……そっか……」

少女――市ヶ谷有咲は数年前、交通事故で両親を無くした。

それ以降、有咲は自分の殻に籠もり、面識の有る数少ない人間――目の前に座っている幼馴染みの青年と彼女の祖母以外とコミュニケーションをとらなくなってしまった。

そんな今まで赤の他人と会話する事の無かった彼女が抵抗を見せなかった。

その事実には青年は驚いたのか眼を見開く。

「それでさ……そいつバンドやってるらしくてさ、さそわれたんだ」

「バンドに？」

「おう、私がピアノやったこと有るって言ったら、今キーボードが居ないから一緒にやろう！、って無駄に高いテンションで誘われた」

「その子凄いい子だな・・・取り敢えず、そのことを切っ掛けに学校行ってみたくなったと」

「それでさ・・・学校行くとさ・・・今みたいに一緒に居る時間減るじゃん・・・だからさ・・・学校行ったらご褒美で抱きしめてくんね・・・？」

有咲が青年に羞恥で顔を赤く染めながら上目遣いで言う。

その姿をみて青年は少し顔を赤らめつつも有咲の事をいじり始める。

「ほうほう、それってつまり有咲は俺のことが．．．」

「べ、別に好きとかそういうのじゃねーぞ！」

「じゃあなんで抱きしめて欲しいの？」

「うっ．．．そ、それは．．．も、もういいだろ！」

「わかったよ、教えてくれるまで抱きしめないから」

「うう．．．」

すこしやり過ぎたか？まあいつも通りだしっか。青年はそんな事

を思いつつ一連のやりとりを楽しんでいた。有咲は羞恥やら何やらが混ざった様な顔をして俯いたままだった。

「ゴメンゴメン。ちゃんとやるよ」

「そ、そっか、ならいいんだ」

青年が謝ると、まだ顔は赤いままだが、有咲は謝罪を受け入れた。

「それじゃ、夏休み終わってから頑張れよ、有咲」

「おう、がんばるよ」

有咲が屈託の無い笑みを浮かべる。

青年は、そんな決意を固めた幼馴染みの背中を押す。

その行為が良い方向へと進むのかどうかは、今の二人には想像が
来ない。

まさに神のみぞ知る事と言ったところだろうか。

ただ、この日、この時間が、有咲の人生においての最大の転換点で
あった事は確かだった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24597

変わり始める君

2020年05月19日 04時30分発行